

名残惜しように、互いの身体が離れていく。

互いに手すりへ背を向けて、リュカの左腕と、ヘンリーの右腕が少しずつ離れていく。

互いの腕を名残惜しく密着させながら、ゆつくりと離れて、互いの掌を指がなぞる。

——離れたくない。——

各々の指の間に互いの指を入れて、掌を合わせてぎゅつと握る。

目線は互いを離さない。

表情は憑き物が落ちたようにすつきりはしている。

「僕たち、遠回りしすぎちゃったね。」

「ああ、そうだな。」

確かめあうように、何度も握り直す。

改めてヘンリーを見つめる。

「遅くなっちゃったけど、ヘンリー。結婚おめでとう。やっと、心から言えた。」

リュカを見つめ、ヘンリーも呼応する。

「俺も。：リュカ。結婚おめでとう。ピアノカさんを泣かせたら俺が許さないからな？」

「そんなことしないよ。ヘンリーこそ、マリアさんを泣かせる事したら、僕が許さないからね。」

水掛け論に発展しそうになったそんな様が滑稽で、互にくすくす笑い出す。

一瞬の沈黙。時が別れを示唆している。

「じゃあ、僕。そろそろ戻るね。」

「……ああ。そう、だな。」

互いの掌が、指が。ゆつくりと解放されていく。

「また……今度は、ピアノカさんも連れてこいよ。待つてから。」

繋がっているのはお互いの中指のみ。

「うん。待つて。ちゃんと紹介する。」

中指第二関節分。

「ああ。」

第一関節分。

「またね、ヘンリー。」

「またな、リュカ。」

指が完全に、離れた。

今まで繋がっていた互いの腕が、支えを失ってだらんと垂れる。

身体が離れた代わりに、互いの視線が絡んでいく。

先ほどとは違う、互いへ向けた憂いの微笑み。

リュカの右手がゆつくりと上がり、ヘンリーへ向かって掌をふる。別れの挨拶。

ヘンリーの左手がゆつくりと上がり、リュカへ向かって